

教育委員会会議録

令和4年(2022年)6月定例教育委員会会議

開 会 日	令和4年(2022年)6月23日(木)	
開 会 時 間	午後2時00分 ~ 5時15分	
開 会 場 所	SPRING熊本花畑町 7階 D会議室 ※一部オンライン開催 オンラインでの出席者については各執務室	
出 席 者	委員会	遠藤洋路 教育長 出川聖尚子 委員 小屋松徹彦 委員 西山忠男 委員 澤栄美 委員
	事務局	松島孝司 教育次長 中村順浩 教育総務部長 田口清行 学校教育部長 他
提 出 議 案	<p>議第42号 臨時代理の報告について</p> <p>議第43号 千原台高等学校におけるスクール・ミッションの策定について</p> <p>議第44号 熊本市立幼稚園まなび創造プログラム(案)について</p> <p>議第45号 令和5年度(2023年度)熊本市立高等学校入学者選抜の基本方針の策定について</p> <p>議第46号 職員の懲戒処分について</p> <p>議第47号 熊本市いじめ防止等対策委員会委員の委嘱について</p> <p>議第48号 令和5年度(2023年度)熊本市立平成さくら支援学校入学者選抜の基本方針の制定について</p> <p>議第49号 熊本市公民館運営審議会委員の委嘱について</p>	
報 告	<p>(1) 第1回広聴事業「日本語指導について」(学校訪問及び教職員との意見交換)</p> <p>(2) 必由館高校改革について</p> <p>(3) 令和5年度(2023年度)熊本市立学校教員採用選考試験の志願状況について</p> <p>(4) 令和5年度(2023年度)熊本市立学校管理職等採用選考試験について</p>	
自 由 討 議	(1) 働き方改革の推進と教職員のメンタルヘルスについて	
署 名	西山 忠男	
	澤 栄 美	
会議録作成者	教育政策課 玉野あゆみ	

<p>〔開会の宣告〕 遠藤洋路 教育長</p> <p>〔会議の成立〕 遠藤洋路 教育長</p> <p>〔公開の審議〕 遠藤洋路 教育長</p> <p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>令和4年6月定例教育委員会会議を開会いたします。</p> <p>本日は、私の他4人の委員が出席しておりますので、この会議は成立しております。</p> <p>会議録署名人は、西山委員と澤委員とします。</p> <p>本日の会議の内容につきましては、会議日程のとおりですが、本日の議事のうち、議第46号 職員の懲戒処分については、会議規則第13条第1号「教育委員会に属する職員の任免その他の身分取扱に関する案件」の非公開事由に該当することから、非公開の審議が適切と思いますがいかがでしょうか。</p> <p>議第46号につきまして、非公開に賛成の委員は、挙手をお願いします。</p> <p style="text-align: center;">(全員挙手)</p> <p>全員賛成により、議第46号は、非公開とします。</p>
<p>日程第1 前回会議録等承認</p> <p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>5月26日開催の令和4年5月定例教育委員会会議録を各委員のお手元に配布しております。この会議録を承認することにご異議はありませんか。</p> <p style="text-align: center;">(異議なしの声)</p> <p>異議なしと認め、前回会議録等を承認することに決定します。</p>
<p>日程第2 事務局報告の件</p> <p>〔1〕事業・行事等報告について</p> <p>○ 前回定例会議（R4.5.26）以降の事業・行事報告</p> <p>○ 今後の予定</p> <p>日程第4 報告</p>	

・報告（1）第1回広聴事業「日本語指導について」（学校訪問及び教職員との意見交換）

《中川浩二 教育政策課長 報告》

遠藤洋路 教育長

では、まずは当日出席をされていた委員の皆様から、感想を含めてご発言があればお願いしたいと思いますけど、いかがでしょうか。

西山忠男 委員

まず、ちょっと質問させていただきたいと思うんですけど、給食の話が出ましたが、イスラム系のお子さんはやっぱり食材にかなり気を使うと思うんです。ハラール処理をした食材を準備しておられるのか、それとも特別な配慮ができない状態にあるのか、そのあたりについて、まずお伺いしたいんですが、いかがでしょうか。

柴田治穂 黒髪小学校校長

イスラム教の子どもたちも数名おりまして、また、一くりにイスラム教の子どもたちといたしても、お国柄なのかイスラム教の宗派なのか、家庭の方針なのか分かりませんが、非常に厳密に食べ物に対して教えを守られる家庭と、ある程度は寛容な対応でいいというご家庭があります。

一番厳格なご家庭は、全く給食を食べずに毎日お弁当を持ってきております。お弁当が傷むのを防ぐために、校長室に冷蔵庫がございまして、毎日そこに入れていているという子どももいます。

また、給食のコースとしては、A、B、C、Dだったかと思いますが、そのぐらいのコースを設けまして、例えば主食と牛乳だけを食べるコースとか、それから食べられるおかずをそれにプラスして食べるというコースとか、そういうものを複数用意いたしまして個別に対応しております。どのコースを選ぶかというのは、子ども、保護者と相談して決めて対応しております。

遠藤洋路 教育長

ありがとうございます。

桜山中学校、田口校長から何か報告その他ありますか。

田口恵子 桜山中学校校長

本校にもイスラム教の生徒がおりますが、ほぼ毎日お弁当を持ってきております。職員室の冷蔵庫に保管して、給食になっ

遠藤洋路 教育長

分かりました。

今の話ですと、もしそういうことが必要になった場合には、日本語指導教室などの空いている教室とか、そういう場所で礼拝をしていると、そういうことでしょうか。

柴田治穂 黒髪小学校校長

はい、そういうことでございます。

遠藤洋路 教育長

分かりました。

他にご意見、ご質問がありましたらお願いいたします。

西山忠男 委員

先ほどお話にありましたように、現状でもやっぱり人が足りないということなので、これは将来的には何とか考えていかないといけないと思います。なかなか人の措置というのは予算が伴うので簡単に増やせる話ではありませんから、それに代わる措置として、私が2ページでコメントをしていますけど、大学の協力体制ということで、熊本大学や学園大に来られている留学生の方にボランティアで、世話役というか話し相手というか相談役というか、そういう交流の場をつくって手伝っていただくというのはいいんじゃないかなと思います。今はコロナ禍でどこの大学も留学生がぐっと減っていますので難しい状況ですけど、5年間かけて留学生を元に戻すという文科省の計画がありますので、また留学生増えてきたらそういうことが可能なんじゃないかと思うんです。

留学生も孤独感を感じている人が多いので、例えば同じ国のお子さんがその小学校にいるんだったら、話し相手になって一緒に仲よくしようということで、留学生もハッピーになるんじゃないかと思うんですよね。

そういう意味で、そういう計画を考えてみたらいかがかなと思います。

遠藤洋路 教育長

分かりました。

うまくそれが運用できればとても効果的だと思いますので、ぜひ検討したいと思います。

同じ2ページのところに書いてある、以前は留学生にこういうチューターがついているというような話も書いてあるんですけど、多分、熊本大学さんがやられていたんだというふうに思

	<p>いますけど、どうなんですか。そういうことを以前はやってたけど今はやらなくなったという、そういうことなんですか。</p>
西山忠男 委員	<p>私はちょっと知りません。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>現実問題、一番留学生がたくさん来て、この協力体制という意味で重要なパートナーになるのは熊本大学でしょうから、大学とも今後協議をして、こういうことができるか探っていきたいと思います。</p> <p>他にはご発言はいかがですか。</p>
出川聖尚子 委員	<p>感想になりますが、先日、教員の先生方から、定住や永住される方が増えているということで、その方たちが高校に行ったときにどんなふうになっているかを気遣われていましたので、学習言語が身につく、ある程度、中学校の卒業時には働いたり、高校に行っても少し学びが続けられたりできる支援をしないといけないと改めて思いました。</p> <p>人数の枠があるので途中で新しい方が入ってくると、途中で新しい方が優先される状況もあるというお話もありましたので、ゴールを決めて、そこまで到達できるように支援し、て送り出せるような仕組みづくりを、人も含めてしていく必要があるというのを思いました。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>分かりました。</p> <p>生活に必要な日本語と学習に必要な日本語で相当レベルが違うとか、学習に必要なものは高度な言語能力が必要になるかと思うので、それが今おっしゃったようにどのぐらい満たせるのかということを見ると、人によっては今の時間数ではもしかしたら足りない場合もあるかもしれません。高校以上に行ったときに日本語で学習できるようにということは確かに理想であり、そのためにどのぐらい時間や人が必要なのかというのは、これからもう少し調べていく必要があるのかなというふうには思いますので、理想としてそれを目指していくということはおっしゃるとおりかなと思います。</p>
出川聖尚子 委員	<p>高校に行って、その後どうなっているかが分からないというお話だったので、その後どういうふうになっているかを追って</p>

遠藤洋路 教育長

状況を把握する、例えば高校を辞めてしまうことがあれば、そういう場合にも仕事に就けているのかどうかで見ると、どの程度まで必要かが分かるのかなと思います。

そうですね。分かりました。

当事者本人に聞くのが一番分かるでしょうからね。卒業生の追跡ということが可能な範囲でできるのであれば、ぜひ聞き取りとかアンケートとか、そこは教育委員会としてもやって、これからどのぐらいのものが必要なのかというのを考えていきたいと思います。

小屋松徹彦 委員

当日は本当に行けなくて残念でした。

意見交換の内容をちょっと見させていただいて感じたことなんですけど、個別指導が原則で、教員1人当たり6人ぐらいが限度となっていることが書いてある一方で、1人で2～3人が精いっぱいだという意見もあります。状況は違うのかもしれませんが、やはり1人で6人というのは相当頑張ってもらってる数字じゃないかなというふうに感じましたので、絶対的にもっと数を増やしていくという必要性があるんだろうなというふうに感じました。

ただ、今後どんどん必要とする児童・生徒さんは増えてくると思いますので、その一方でなかなか教員数は増やせないという、そういう現実がありますから、そこを何とか埋める意味では、サポーターといいますか、そういった方々を、何とか登録制とかにして、いつでも来ていただけるような、そういう体制づくりというのは一方でやっていったほうがいいのかと思いました。

遠藤洋路 教育長

分かりました。ありがとうございます。

これから人数がものすごく増えてくれば今の体制を維持するというのは難しいでしょうから、抜本的に増員する必要もあるのかなというふうに思っています。実際どのぐらい今後増えるか、それも見ながら、特に県内のいろんな動きがありますので、例えば急に倍になるとか3倍になるとかそういうことが起こるのであれば、今までのやり方ではなくてかなり思い切った方策が必要になってくるかなと思いました。そこはこれを機に考えていきたいなと思っています。

中川浩二 教育政策課長	<p>委員の皆様、本当にご意見をいただきありがとうございます。</p> <p>日本語指導については、今後、外国の方々の定住促進というの も、熊本市の人口減少に対する対応の一つとして重要なポイント であるかと思っておりますし、TSMCの関係で、まだ実際に どちらに居住されるのかというような情報までは把握しており ませんが、特に熊本市にお住みになるということも想定を する中では、今後、この拡充対策というのは取り組んでいか なくてはならないことだというふうに認識をするので、また学校 現場のご意見を伺いながら進めてまいりたいと考えておると ころです。</p>
西山忠男 委員	<p>最後の今後の検討事項と対応の方向性、3つまとめてある んですが、要望の強かったセンター校の設置について、これは かなり難しいことなんでしょうか。それともやろうと思えば すぐにできることなんでしょうか。その辺をお伺いしたいと思 います。</p>
中川浩二 教育政策課長	<p>センター校の設置といいますと、日本語指導教室をするとい う部分では、学校の空き教室、余裕がある教室、学校等を選 定して、先ほど学校現場でのご意見もありましたように、市 内一円をカバーできるような場所に、適地といいますか、学 校を考えていくという必要がございます。状況によればすぐ にでも対応ができる場合はあるかもしれないと考えておると ころです。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>人を増やすというのは別の問題としてはありますけど、場 所の問題という点では、具体的にどこの学校にそういう空 き教室があるのか、使えるのかということをお早急にお伺 いして、まずセンターの場所をどこにするかということを決 めれば、あとはそんなに難しい話ではないのかなと思いま す。</p> <p>せっかくですから、校長のお二人からも最後何かご発言 があればお願いしたいと思います。</p>
柴田治穂 黒髪小学校校長	<p>先ほども申し上げましたが、日本語があまり分からずに 日本に来て、そして二十数時間のうち4時間は日本語の指 導を受けているという子どもがいます。後20時間前後は 日本語が分からないまま授業を受けているという子どもが いるというのが現実でございます。</p> <p>ですので、ぜひとも支援員を増員していただいて、外国にル</p>

<p>田口恵子 桜山中学校校長</p>	<p>一ツを持つ子どもたちも、ああ、熊本の学校で学んでよかったなど、こういうことを学んだということができるようになっていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>本校だけでもモンゴル、中国、アメリカと生徒がおります。先ほど留学生のお話もありましたけど、国際交流会館にいろいろ相談でお電話したりするんですけど、なかなかシステム化がまだできておらず、多言語にもなってきておりますので、英語だけでは対応できないことが多々出てきております。ですので、どんな言葉でも相談やサポート、保護者の支援などができるような、何らかのシステムができるといいなと思います。どうぞよろしくお願いいたします。</p>
<p>柴田治穂 黒髪小学校校長</p>	<p>今、柴田校長の話聞いていて少し思ったんですけど、4時間という時間で今やっているわけですが、先ほどあったように、学習言語といいますか、学習に必要な言葉のレベルを獲得するために、もっとも時間が必要だということでその時間を増やした場合には、逆にふだんの授業を受ける時間が減ることになるわけですね。日本語の習得を優先して日本語の時間を増やして、その他の時間が減るということも可能なんですか。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>これもいろいろ個人差があるのではないかと考えます。例えば、少し日本語が上手になりつつある子どもに対しては、今やっている授業の勉強と関連づけて、今やっている勉強を日本語で少し詳しくゆっくり教えるとか、ここが個別指導のいいところで、今やっている勉強と日本語を両方同時に学習しているという子どももおります。</p> <p>まだ日本にやって来たばかりで、サバイバル日本語ということで、本当に生活に必要な日本語を勉強している子どももおります。そういう子どもは授業のことを日本語でというのはちょっと難しいんですけど、そのように個別に対応しております。</p> <p>教育長が言われたように4時間を6時間に増やした場合、その効果が出るお子さんもいると思います。個によって違うと思います。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>そうですね。分かりました。</p> <p>確かにまずは日本語を重点的にやろう、やったほうが良いというお子さんと、ある程度学習しながら大丈夫だというお子</p>

さんと、その段階も大分違うのかもしれませんが。
よく分かりました。ありがとうございます。
他にご発言がなければ、本件は以上といたします。

日程第3 議事

- ・議第49号 熊本市公民館運営審議会委員の委嘱について

《大石雄一 生涯学習課長 提出理由説明》

〔採決〕 【原案どおり承認された】

- ・議第42号 臨時代理の報告について

《中川浩二 教育政策課長 提出理由説明》

〔採決〕 【原案どおり承認された】

- ・議第43号 千原台高等学校におけるスクール・ミッションの策定について

《松永直樹 学校改革推進課長 提出理由説明》

西山忠男 委員

前回の私の提案に対して大幅に私の意見を取り入れていただき改訂してくださって、ありがとうございます。

これで結構だと私は思うんですが、千原台高校の先生方はこれは十分納得されているのでしょうか。その点をお伺いします。

松永直樹 学校改革推進
課長

スクール・ミッション、またスクール・ポリシーの文言を定めるにあたりましては、校長が参加する会議の場、現場の先生方が魅力づくり部を中心として議論を進めまして、様々なご提案をいただいたうえでこの文言を整理したところでございます。

	<p>ですので、十分先生方のご理解も得ながら進めたというのが現状でございます。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>前回の案から今回の案に変わるまでの間にも意見は聞いたんですか。</p>
松永直樹 学校改革推進課長	<p>時間的ないとはございませんでしたが、学校にもお出しし、ご意見をいただいたうえで決定したものでございます。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>分かりました。 他にご発言はありませんか。 他にご発言がなければ、採決を行います。 議第43号 千原台高等学校におけるスクール・ミッションの策定についてご承認いただくことにご異議ありませんでしょうか。</p> <p>(異議なしの声)</p>
遠藤洋路 教育長	<p>ご異議なしと認めます。 議第43号については原案のとおり決定いたします。</p>
<p>・議第44号 熊本市立幼稚園まなび創造プログラム(案)について</p> <p>《松永直樹 学校改革推進課長 提出理由説明》</p>	
西山忠男 委員	<p>特別支援教育の充実のところ、ことばの教室の拡充とあゆみの教室の拡充について書いてありますが、これは現状ではどれぐらい足りないということなのか、今後の対応についてご説明いただければと思います。</p>
松永直樹 学校改革推進課長	<p>現状は、想定より多い方の申込みがあっている状況でございます。その調整をしていく中で、実際に受けるに至らない理由が、通うのが困難というものでございます。今いる幼稚園なり保育園から通っていて、送迎の時間の問題、そういったものがございます。ですので、まず市立幼稚園各園に分散をしていくことでその負担を少しでも軽くしたいと思っております。場</p>

遠藤洋路 教育長

合によっては、市立幼稚園に通うお子さんが、そのまま自園通園というかたちで通園するというかたちも増えていくと思っておりますが、まずその対応が必要だと考えております。

また、今ある通級指導教室については、基本的には所在する区の方の利用が非常に多いというような状況がございます。分散化しますと潜在的なニーズがまた出てくるということがございますので、今後、基本計画ができた際に保護者等に周知してまいります。そこで掘り起こせたニーズについてしっかり対応する必要があります。当然、今よりも申請は増えてくるということで、今後、更なる拡充でありますとか指導員の充実ということは考えていかないといけないところでございます。

所在する区の利用者が非常に多いということは、近くの人しか来られていないという可能性が高いと思いますので、各区に分散すればもっと希望者は増えるんじゃないかということですね。

他にご発言はありませんか。

他にご発言がなければ、採決を行います。

議第44号 熊本市立幼稚園まなび創造プログラム（案）について、ご承認いただくことにご異議ありませんでしょうか。

（異議なしの声）

遠藤洋路 教育長

ご異議なしと認めます。

議第44号については原案のとおり決定いたします。

・議第45号 令和5年度（2023年度）熊本市立高等学校入学者選抜の基本方針の策定について

《福田衣都子 指導課長 提出理由説明》

西山忠男 委員

以前もお尋ねしたんですけど、学区外入学枠について、まずなぜこれを設けないといけないのかという点、それから学科またはコースによってその枠のパーセンテージが異なっているのはなぜかという点、この2点をお伺いしたいんですが、いかがでしょうか。

福田衣都子 指導課長

学区外の枠を設ける理由といたしましては、まず、学区外からの出願者も多く見られることと、逆にそれぞれの出願者が少ない場合もありまして、それぞれの状況が違います。学区外の入学枠については、健康スポーツ探究科におきましては学区外からの出願者が多いため大きく広げております。情報ビジネス探究科につきましては、学区外からの出願者が少ないためにこのような数値で考えているところでございます。

西山忠男 委員

私の基本的な意見は、どこの学校も定員割れで苦しんでいる状況なのに、なぜこういう枠をつけないかという事です。市立高校だから当然熊本市民を一定すべきだと、そういう基本的な考えは分かるんですけど、熊本県内の他の地域や県外から応募者が来るようであれば、それはそれで喜ばしいことだと思うんですね。それによって資質の高い学生が集まってくるんだったら他の学生にもいい影響を及ぼすでしょうし、学校全体のレベルも上がると思うんです。

ですから、わざわざ枠を設けなくても、当然熊本市民が大半な状況には変わりはないと思うんです。そういう意味では、この枠を設けるということ自体がもう時代遅れになっているんじゃないかなという印象を持つんですけど、いかがでしょうか。

遠藤洋路 教育長

学区外の枠を設ける必要があるのかというのは、学区外からそもそも入れなくていいんじゃないかという意味じゃなくて、学区外から入れる人数を制限しなくていいんじゃないかと。

西山忠男 委員

はい、そうです。

福田衣都子 指導課長

西山委員には昨年もお尋ねいただいたということで、学区外の割合についてはお答えをしたところではございますが、ご指摘のとおり、最終的には受験生が様々な教科、学校の特徴に応じて希望する学校へ行けるということとはとても重要であると考えております。

そのような中ではございますが、やはり熊本市内の子どもたちの状況、市外の子どもの状況を考えながら、今年度につきましてはこの枠で設定をさせていただきたいと考えております。

西山忠男 委員

今年度はこれで結構なんですが、将来の考え方として少し検討したほうがいいんじゃないかなと思います。

遠藤洋路 教育長

分かりました。

では、他にご発言がなければ採決を行います。

議第45号 令和5年度(2023年度)熊本市立高等学校入学者選抜の基本方針の策定について、ご承認いただくことにご異議ありませんでしょうか。

(異議なしの声)

遠藤洋路 教育長

ご異議なしと認めます。

議第45号については原案のとおり決定いたします。

・議第47号 熊本市いじめ防止等対策委員会委員の委嘱について

《須佐美徹 総合支援課長 提出理由説明》

[採決] 【原案どおり承認された】

・議案第48号 令和5年度(2023年度)熊本市立平成さくら支援学校入学者選抜の基本方針の制定について

《野田建男 特別支援教育室長 提出理由説明》

小屋松徹彦 委員

4ページの出願資格の中に新たにウというのがありましたよね。「令和4年度に平成さくら支援学校の教育相談を受けている者」、これを加えられた理由を教えてください。

野田建男 特別支援教育室長

去年の基本方針では、この出願資格の一番最初の部分に「教育相談を受けた者」というふうに表記をしておりました。それを分かりやすくするために、下に下ろしたところがございます。

小屋松徹彦 委員

分かりました。

遠藤洋路 教育長	場所が変わったということですか。
野田建男 特別支援教育 室長	そういうことでございます。
遠藤洋路 教育長	分かりました。 他にご発言がなければ採決を行います。 議第48号 令和5年度（2023年度）熊本市立平成さくら支援学校入学者選抜の基本方針の制定について、ご承認いただくことにご異議ありませんでしょうか。 (異議なしの声) ご異議なしと認めます。 議第48号については原案のとおり決定いたします。
日程第4 報告	
・報告（2）必由館高校改革について	
《松永直樹 学校改革推進課長 提出理由説明》	
遠藤洋路 教育長	1つ確認ですが、2ページの真ん中あたりに、「必由館高校においては設置学科を従来の『普通科』とは異なる『新たな普通教育を主とする学科』とする融合案を提案していくこととした」と書いてあって、3ページに今後の方向性としてどうすると書いてあるんですけど、これは今この場で教育委員会会議にそういう提案をしているという意味なのか、それとも今後改めてそういう提案が出てきますよということなのか、どちらでしょうか。
松永直樹 学校改革推進 課長	まず、2ページのアンダーライン部分、「融合案を提案していくこととした」ということについては、6月16日に学校と事務局とで議論した際の整理事項をまとめたものでございます。それを受け、事務局としまして、今後の方向性としては、必由

	<p>館高校においては設置学科を新たな普通教育を主とする学科として検討する方向であることをご報告させていただきました。最終的には、今後早ければ9月に基本計画の素案を、12月に基本計画案をお出しできたらと考えております。その中で最終的にご議論いただき決定をしたいと考えているところでございます。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>分かりました。では、提案というのが改めて出てくるんだけど、今は中間の検討状況の報告で、後で提案するときに、いや、これじゃ駄目ですよといきなり言われても困るから今のうちに意見聞いておこうと、そういうことですか。</p>
松永直樹 学校改革推進課長	<p>表現は別にして、そういったことでございます。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>分かりました。 では、必由館高校のことですから、校長からも今の説明以外のことで何かあればお願いします。</p>
城野実 必由館高等学校校長	<p>今の文章のことですが、参考資料の4ページにも書いてあるし、もともとの資料の2ページで小さく書いてあったんです。普通教育を主とする学科が普通科しかなかったのが、今年4月から普通教育を主とする学科の中に普通科と、学際領域を中心にする学科、地域社会学科、その他の普通科というものができるようになって、うちとしてみれば普通教育を主とする学科の地域、学際、こういう方向性でいきたいということで意見をまとめたところです。 表現の中に普通科と異なると書いてあるんですけど、普通科の中の普通科を主とする科ということで生徒にも説明して、昨年度から普通科の存続と大幅な生徒数減に対して生徒は不安を感じておりましたので、それについては324という今の、まだ人数的なもののはっきりしていませんけど、前回の7クラスからは9クラスという状態で大幅な生徒数減になっていないことで生徒も了承しているような状況です。 それから、案として令和6年4月の開校を目指すという部分がありますが、まだ協議中です。学校としてみれば、今年令和4年度の入学生から新しい学習指導要領が始まりまして、その子たちが3年生になったときが令和6年度になります、令和6</p>

	<p>年度は新学習指導要領による初めての卒業生になり、大学進学やいろんな面で学校全体としても集中したいので、できれば方向性だけ決めてもらって、令和7年4月の開校のほう为学校としてはありがたいということで、今、協議をしているところです。</p> <p>それと同じように、中学生に対しての説明が来年のこの基本方針で初めて出て、その年の3年生が受験するというのはちょっと期間が短いかなという気がしております、そういう時期等も中学校の校長会とかいろんなところで話を聞きながら、いつから始めるのかを検討していただければと思っているところが、ここに書いてある文章と違う部分です。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>普通教育を主とする学科というのは2ページとか参考資料にありますけど、参考資料を見るといろんな領域とか特色があるんですよね。そこはどんな特色を考えて、普通教育を主とする学科にしたいという案を出されたんでしょうか。</p>
城野実 必由館高等学校校長	<p>今、学校として特に考えている部分については、地域社会学科みたいな感じで、市役所のそれぞれの局に市の課題とかそういうものを学校で説明していただいて、1年生のときにその課題に対する、自分たちだったらこういう提案ができるというようなことをやっていく。そこで本人たちが熊本市の課題にしっかり全クラスで取り組むような学校設定教科を考えております。その延長線上で、本人たちが将来的に学んでいく学問とか、将来のキャリア教育に向けて何を学んでいくのかというのを、2年生の学級設定科目なり探究の時間にそういうことを学び、進路選択を確実なものにしていくようなカリキュラム編成を考えております。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>分かりました。</p> <p>では、学校改革推進課長と必由館校長から説明がありましたが、本件についてご意見、ご質問がありましたらお願いします。</p>
西山忠男 委員	<p>私も教育長と同じ感想を持ったんですけど、新たな普通教育を主とする学科というのは何なのかというのが明確に定義されていないような印象を受けたんですよね。参考資料の4ページ、学際領域学科、地域社会学科、その他普通科、これを赤で囲んであって、それらを融合したものが新たな普通教育を主とする</p>

	<p>学科というような説明にも聞こえたんですけど、校長先生の今のご説明だと地域社会学科的な学科であると。そうであれば、もう少し何かネーミングを考えたほうがいいと思うんですね。普通教育が何なのかというのが、どうしてもすぐには分からないと思います。</p> <p>もう一点気になったのは、生徒さんとの意見交換の中で、理系にも進学できる自由度があるから普通科を残してほしいという話があったんですね。そうすると、地域社会に特化したような学科でもちょっと困るんじゃないかなという印象を持つわけですから、そういう理系にも進学できるメリットというのをもう少し上手に表現できないかなと思うんですけど、その点いかがでしょうか。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>1点目の新たな普通教育を主とする学科というのは、こういう学科名にするという意味じゃなくて、実際にはまた違う名前になるということでしょうか。</p>
松永直樹 学校改革推進課長	<p>委員ご指摘のとおり、令和4年4月に新たに始まった、これまでになかった学科ということになります。それを今、新たな普通教育を主とする学科等と表現しておりますけど、やはりここはちょっと分かりづらいところがあります。文科省も、実際に学科を設置するに当たっては学科の性質がより分かりやすくなるような学科名をつけるようにとお示しされております。我々も今後、その点は生徒募集に対して非常に重要なところと思っておりますので、十分に検討したいと思っております。</p> <p>その中で、先ほど城野校長先生は地域社会学科的な発想の中でやっていきたいということを申されましたが、新しい学科でありますので、当然、学際領域的なものを含んでも別に問題もございません。そもそも地域社会を考えていく上で、例えば環境問題一つ取っても様々なアプローチがあります。法的、社会的、科学的アプローチ等様々なアプローチで課題を解決するということが今は求められておりますし、当然理系分野を排除するというのも全く考えておりません。どちらかという文理融合的な、分野横断的な学びにしっかり取り組むと、そういった中で、西山委員からもご指摘いただいたような、今まで必由館にはあまり理系を望んで来ている生徒は文系と比べて少なかったところではございますが、理系分野でしっかり学びたい生徒に対しても、十分そういった要望に応えられるような学科の構</p>

	<p>築をしてまいりたいと考えております。</p> <p>その中で様々な課題があると思います。例えば一般的に言えばSTEAMとかデータサイエンスとか、様々な動きが全国的にあっておりますし、大学においてもそういった分野に力を入れる、理系分野のみならず文系分野においてもデータサイエンス含めて取組が進められるという方向性がもう明確に出ていますので、そういった全国的な動き、大学の動きも見据えながら、今ご指摘の点に応じていけるようなカリキュラム編成としたいというふうに考えております。</p>
西山忠男 委員	<p>城野校長先生のお話は理解できるんですよ。ただ、今の課長のお話だと、いろんなものを盛り込んでしまっただけで特色が薄れるような気もするんですよ。そこがちょっと難しいところで、普通科で9クラス、うち普通探究コースというのを7クラス設けるわけですけど、それを全部地域社会に特化したクラスにするのもおかしいという気がするし、なかなかそこが難しいところです。クラス分けして例えば理系に特化したクラスとか地域社会に特化したクラスとか学際融合クラスとか、そういうふうに分けるという案も考えられるのかなと思います。学生の配分とか希望どおりに配分できるかとかいろいろ難しい面はあると思いますけど、やはり特色を出していかないとどうしようもないと思うので、そこを明確に打ち出した学科構成にしていきたいなと思います。</p>
松永直樹 学校改革推進課長	<p>今のご指摘の点は非常に重要だと思っております。校内プロジェクト会議でもその点について学校側と議論を重ねております。現時点においては、まだ結論を出せるまでの議論の深まりはございませんが、おっしゃられるとおり、コースや類型に応じてより特色を打ち出せるようにしたほうがいいのか、またそれに対して入試をどのように関連づけていくかなど、そういったものもございますので、今後基本計画を策定する中で、ある程度整理いたしまして、お示しができたらと考えております。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>新たな普通教育を主とする学科というのは令和4年4月1日から設置が可能となったということで、今年度ということだと思いますけど、他の都道府県で何か実例はあるんですか。</p>

<p>松永直樹 学校改革推進課長</p>	<p>実例はございます。まず、長崎県立松浦高等学校が今年度の4月から新たに開校しております。こちらは地域科学科というものを設けて取り組んでおります。</p> <p>他にも、令和5年4月には京都市立の開建高校が開校の準備を進めておられますが、まだ学科名等についてはホームページ等で公表があっておりません。</p> <p>また、先ほど申しあげました国の補助制度に絡んでなんですが、現在補助申請をされていて今後新たな普通教育を主とする学科の検討を進める学校が約18校ございます。ですので、我々もこの方向でということであれば、文科省に2次募集が可能かどうかをかけた上で申請し、年間560万円の補助を得たいと考えております。</p> <p>ただ、この補助制度が今年度新設ということで、まだ予算上は単年度しかついておりませんが、実際は複数年度支給も可能とお聞きしております。3年補助があるとなるとかなり大きな金額にもなっておりまして、文科省の様々な改革に資する他の支援策もございますので、そういったものも最大限に活用して改革が進められたらと考えているところでございます。</p>
<p>澤栄美 委員</p>	<p>非常に興味深く拝見しました。これからある程度の準備が要ると思うんですけど、学際領域にしても地域社会学科にしても協力していただける場所というのはやはり必要ですね。そういったものの先生を今後どう考えていくのかということが1点、それから私の経験上だけでもものを言うんですが、小中学校だと総合的な学習の時間というものになりますけど、教科優先で教育が行われていると、なかなか総合的な学習の時間が充実しているかと考えると、例えば去年までの北部中学校みたいに積極的に取り組んでいるところもあれば、案外やっていないところもあるというような実情の中で、子どもたちがこういった探究の時間のイメージがどんなふうに湧くのかなというのを考えると同時に、例えば国語の先生、社会の先生など教科ごとにいらっしゃるんですけど、どの程度の指導力を持ってここに臨まれるのかということをお聞きしたいと思いました。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>今のはどうですか。</p>
<p>城野実 必由館高等学校校長</p>	<p>まず1つ目の部分ですけど、学際領域に関する学科というものには必ずコーディネーターの配置が必要になります。地域社</p>

	<p>会に関する学科をする場合にもこのコーディネーターが必要になって、その橋渡しのものについてはそのコーディネーターを中心に、学校から要望を出したものに対して、大学や市役所との関わりをお願いしようという方向で考えております。</p> <p>それと、今、総合的な探究の時間については、今年度から学校探究部を中心にやっております。探究の研修は昨年度4回、また今年も4回ほど外部の学校から来てもらったり、大学の先生から指導を仰いだりしていきながら進めております。今年のカリキュラムでは、1年生の場合は普通科が2時間、他の国際、芸術、服飾デザインは1時間の探究になっていますけど、そこでしっかり、今ちょっと大変な思いで準備をしながらやっているような状況であります。</p>
松永直樹 学校改革推進課長	<p>今、城野校長先生から学校での取組がありました。事務局としての支援体制をご紹介させていただきたいと思っております。</p> <p>千原台高等学校においては先行して改革が進められております。その中でコーディネーター、アドバイザーとして大学の先生でありますとか地域人材、経済界含めて、様々な方にアドバイスいただきながら進めております。そういった方々のご協力を得て進めているものが必由館高校についても生かせるであろうと考えております。</p> <p>また、先ほど北部中学校の例をご紹介いただきましたが、当時の北部中学校校長が、今現在、学校改革推進課の教育審議員をしております。この審議員も学校に入って授業づくりを支援するなど、実際に企画をしております。</p> <p>さらには、研修のお話も先ほどありましたが、昨年度より研修のための予算を確保しまして、千原台、必由館合同の研修を行うなど取組を進めております。</p> <p>そういった中で、特に県内の各大学におかれては、我々が進める市立高校改革について、またビジネス専門学校改革について協力をしたいということで大変ありがたいお申出をいただいております。もう既に具体的なビジョンが描けるところまで来ております。</p> <p>こういった部分についても、今後ご紹介をさせていただきたいと考えております。</p>
澤栄美 委員	<p>とても楽しみだと思って聞きましたので、ぜひ子どもたちの充実した未来が開ける中身になるといいなと思いました。あ</p>

<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>ありがとうございます。</p> <p>私からも1つ聞いていいですか。先ほどの説明だと、コーディネーターという人の役割が非常に大事になると思ったんですが、この何百人もいる生徒の探究をコーディネートするというのは1人でできる仕事ではないように思うんですけど、どんな人をどのぐらいコーディネーターとして置くのか、想定はあるんでしょうか。</p>
<p>城野実 必由館高等学校 校長</p>	<p>今幾つの分野でやっているかという正式な数字を持ち合わせてはいませんけど、今、探究の時間でやっている中でも幾つかの分野に分かれて先生たちが担当して探究をやっています。今、授業しながら大学と日程調整とかする部分をコーディネーターを中心にやってもらいたいので、学識がある人でなくても理解できる人だったらいいのかなと考えています。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>何か分野ごとにコーディネーターを置くような想定でしょうか。</p>
<p>城野実 必由館高等学校 校長</p>	<p>学校の中で分野ごとには分けているので、学校の要望を分野ごとに提示し、1人の人に、この分野だったらこの大学という橋渡しをしていただければいいのかなと思っています。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>1人の人が全部の分野のコーディネートができればそれがいいんですけど、できなければ当然それぞれの分野に詳しい人がそれぞれの大学の先生も知っているでしょうし、どこで何やっているかも知っているでしょう。それを全部知っている人がいれば1人でもいいですけど、なかなか人材を探すのは難しいでしょうから、ここは大事な役割ということですね。分かりました。</p>
<p>澤栄美 委員</p>	<p>私は、コーディネーターのことは、当然子どもを指導する教員がいて、その活動に対するコーディネーターという意味に理解しています。</p> <p>ふと思ったんですけど、それは例えば報酬が発生することじゃなくて、例えば大学の先生であれば研究の一環としてそれをなさるとか、何かそういったことになるんでしょうか。例えば企業なら、今、NTTなど、いくつかの企業は教育部門を持</p>

松永直樹 学校改革推進
課長

っていて、それ自体が仕事だったりしますが、そういった立場的な部分、報酬も含めて、どんなふうを考えておられるのでしょうか。

今ご指摘の点はこれから詰めていくところでございます。先行事例も当然ございますので、そういった例も参考に考えておりますが、先ほど教育長のご指摘がありましたように、その方の得意分野、お一人で全ての分野をカバーするというのは非常に難しいでしょうから、例えば学校における様々なコーディネートをやっていただくとか、もしくは地域において、市立でございまして市の様々な行政機関、様々な局に対するコーディネート、これは必由館、城野校長におかれましては、市立ならではの特色として強く取り組みたいということでもございまして、そういった部分のコーディネート等、様々あると思います。今申し上げたコーディネートであれば、例えば我々行政職員でも当然できますし、任用の在り方というのは様々なパターンが考えられるかと思えます。

また、国においてもコーディネーターの配置に関する様々な支援策がございまして、そういったものも活用し、もう少し詰めてまた今後の在り方をお示しできたらと考えております。

遠藤洋路 教育長

企業とか大学の窓口になっている人はそれぞれの企業や大学にいらっしゃるでしょうし、その人たちがこのコーディネーターになるというよりは、学校側の窓口になる人がこのコーディネーターなんだと思いますので、常勤か非常勤かとかそういったことは別にして、立場としては学校の人、ボランティアというよりは学校の常勤なり非常勤なりの職員という立場で学校側のコーディネートをやるんじゃないのかなというふうには、これを見ると思えます。それに誰になるかというのはこれからの話なんだろうし、市役所とのコーディネートだったら確かに市役所を退職した人とか一番詳しい人がいるかもしれませんが、そういう話なのかもしれないですね。

西山忠男 委員

先ほど澤委員がおっしゃったように、総合的な学習の時間とか探究的な学習活動が成功するかどうかというのは、ひとえに教員の指導力によっていると思います。ということは、やはり教員の資質を高める、あるいは教員の能力を高めることが非常に重要で、そのために研修を計画しているということをおし

	<p>やいますが、それも大事なことなんですけど、大事なことは教員自身が、自分が伸びよう、そういう指導ができるようになっていこうと思って努力されることだと思うんですね。</p> <p>そのためには、上からの押しつけられた改革だという意識が教員にあると成功しないので、自らこの学校をよくしていくのだという気持ちを教員の皆さんに持っていただかないといけないと思うんですね。だからそのために私たちと何度も話し合いを持ったりしているわけなので、ぜひ先生方がそういう気持ちになっていただけるように努力していただきたいし、私も努力したいと思っています。</p>
松永直樹 学校改革推進課長	<p>今の点は非常に大事だと思います。先生方が改革が必要だという思いで進めるのと、そうでないのではかなり計画の内容も異なってくると思いますので、先生方とは課題を共有しながらしっかりと進めてまいりたいと思います。</p> <p>また、もう一つ申し上げますと、小中学校においては総合的な学習の時間で、今申し上げているような探究的な学びは進んでおります。そういった子どもたちが今どんどん高校に進学している状況でございます。ですので、そういった市立ならではのところでは、小中学校の実践というのがベースにあつての高校での実践ということになりますので、かなり面白い取組が今後出てくるのではないかなと私も楽しみにしているところであります。ある意味、小中学生が今までやってきたこと以上のものに取り組めるように、魅力的なカリキュラムを学校の先生方と一緒に作り上げたいと考えております。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>今の点は校長からは何かありますか。</p>
城野実 必由館高等学校校長	<p>探究に関しては本当に積極的に先生たち学ばれて努力されています。もともと一昨年のKumamoto Education Weekの中で世界大会とかに出ているいきながら最初は一部の生徒でやってきたことが、今年もまたEducation Weekで発表すると3年連続での発表となり、他の生徒もそれを見ることとなります。先生たちも、最初は担当の人しかしていなかったものが学校全体として取り組んでいる途中であり、先生たちの意欲は責任を持って上げていくという方向で今頑張っております。あとは方向性をもっと話し合いながらできればと思っております。</p>

小屋松徹彦 委員

今後の方向性の中での学級編制なんですけど、今回、少人数学級を導入するとなっていますが、にもかかわらず30人から36人で引き続き検討となっています。少人数学級を編制するのであれば36人より30人のほうが絶対いいんじゃないかなろうかと私は個人的に思っています、そこは30人ということで、あと足りない分というのは、先生が足りなくなるとか、そこら辺を改革であれば考えていいんじゃないかなと思いますが、何となくこの表現を見ると、他のことと関連させて30人なのか36人なのかという感じがするんですけど、どうなのでしょうか。

松永直樹 学校改革推進課長

高校と事務局と分けて考えた場合のことでご理解いただきたいんですが、まず私たち事務局としましては、少人数学級というのは非常に委員ご指摘のとおり有用ではないだろうかというふうに思っております。小中学校の実践もございまして、高校でも私立高校において先行して30人学級で取り組まれている学校がかなり成果を上げておられる状況でございます。そういった実践例を見ても30人学級が打ち出せたらそれは非常に魅力かなと考えております。

一方で、学校としましては、30人にしてしまうと生徒数が大きく減り過ぎてしまうのではないかなというようなご懸念を学校現場、教職員も生徒も同窓会もお持ちで、そこをどう調整するかというのがまだ議論として整理ができておりません。一律に30人とするのか、クラスの性質によって、一部のクラスは30人にして一部は35人や36人にするのかとか、そういった融合案的なものも含めまして今後詰めたいて考えております。少人数学級の意義というのは、それ自体は先生方も我々も共通の認識で取り組んでいるところでございます。

遠藤洋路 教育長

今の説明だとつまり、一クラスの人数は、それは少ないほうが指導上はいいんだけど、学校全体だと人数が多いほうがいいという、そのバランスをどうするかという、そういうことですか。それとも一クラスの人数も教員としては実は36人とか40人のほうがいいという話ですか。そういうことじゃないですよ。

<p>城野実 必由館高等学校 校長</p>	<p>生徒数に関しては大幅に減らすのではなく、継続的に将来的に周りの状況を見ながら減らさざるを得ないと思っています。県立も35人になりました、30人になりましたという方向性が出てくる前には減らす方向になるのでしょうか、現状、県立学校が40人のときに、まだこれだけの倍率でうちに来たいと思っている中学生がいる中で、中学生の希望を尊重しながらという部分と、学校の運営上の部分で段階的に減らしていきたいなという思いがあるというのが本音であります。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>今おっしゃったのは、学校全体の人数をできるだけ維持するために段階的に減らしたいということなのか、1クラスの人数をできるだけ減らしたくないという話なのか、そこが見えなかったんですけど、どっちなのでしょう。</p>
<p>城野実 必由館高等学校 校長</p>	<p>全体の人数を段階的に減らしていくということです。クラスの人数に関しては、当然同じことだと私は思ったものですから、36人からスタートするのか35人からスタートするのか、クラスによっては、コースによっては30人からスタートする場合もあるだろうし、その部分については今後検討していきたいと思っており、スタートラインは全て30人ということは学校としてはあまり考えていないという部分です。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>分かりました。学校としては1クラスの人数と学校全体の人数が直接連動しているという、そういう認識だという、そういうことなんです。分かりました。 小屋松委員、いかがですか。</p>
<p>小屋松徹彦 委員</p>	<p>そこにちょっと違和感を覚えるわけですよ。30人学級をつくるというのは市立高校ならではの特色の大きな目玉になりそうな気がするものだから。確かに今は倍率あるかもしれませんが、その倍率のある人たちが30人学級で勉強する、さらにまたレベルもアップするんじゃないでしょうか。だから、324人の1クラス30人だったら先生の数を増やさないといけないという問題になるかもしれませんが、それはそこで増やしていくってという方向性で考えればいいのかと思うので、やっぱり30人学級のほうがいいんじゃないかと私は思います。生徒の数と連動させて考えるというのは、ちょっと改革としてはもったいないなと思います。</p>

<p>城野実 必由館高等学校 校長</p>	<p>事前にも指摘を受けていたんですよ。少人数だけを優先すれば30人のクラスということも可能ではあるんですけど、部屋数が足りないという現実がありまして、増改築なしで考えた場合にはという状況です。だから、30人学級のほうがいいのはいいんですけど、それを10クラスとか11クラスに、現状、学校内で分けていくということをした場合に部屋数が足りなくて、それは現実的ではないということが頭の中にあった発言です。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>物理的な制約を考えなければ、それは1クラスはできるだけ少人数にして、学校の人数はできるだけ維持するのがいいのかもしれないですけど、それを現実問題どこでバランスを取るかという、そういう話ですよ。分かりました。</p> <p>どこまで範囲を広げて検討するかですよ。施設は一切手をつけないという前提で考えるのかどうかということはあるのかもしれない。</p>
<p>出川聖尚子 委員</p>	<p>1点、新しく普通教育を主とする学科で新たな学科を考えられているという話だったと思いますが、新しい学科の大事な要素というのはいろいろあられるという話だったかと思います。小学生や中学生、そして保護者にも分かるように取組を分かりやすいかたちで発信するというのを意識されて、子どもに向けて発信されるといいのではないかと聞いていて思いました。今いる学生さんもそうですが、これから入られるお子さんがここに行きたいなと思えるような発信を事前にできるといいのかなと思いました。</p>
<p>松永直樹 学校改革推進 課長</p>	<p>先ほども申し上げましたが、新しい普通教育を実施する学科というのは新しいかたちでございますので、これだけだと非常に分かりづらいというのはそのとおりだと思います。どう興味、関心を持っていただくかというのは重要事項でございますので、分かりやすい資料を先行事例も参考に今つくっております。実際に生徒と協議をしていく中では、ビジュアルシート、3枚ぐらいの資料なんですけど、目に見える、ビジュアル的に頭に入りやすいようなシートをつくってお示しをして議論をしてみました。</p> <p>また、学科名等も決まっていないような状況でお示しができ</p>

	<p>ておりませんが、そういったものができましたらまた改めてご紹介をさせていただきたいと思います。先進事例においてもかなり大胆に広報資料をつくっておられます。そういったものを参考にしながら、分かりやすいものにしたいと思います。</p> <p>さらに、市の小中学生は1人1台タブレットがございますので、それを最大限に活用して、市のメリットは最大限享受して広報ができたらと思っているところでございます。</p>
遠藤洋路 教育長	大前提の確認ですけど、今いる人は当然卒業するまで今の学科コースですよね。新しく入ってきた人からもちろん新しくなるわけですね。
松永直樹 学校改革推進課長	はい。
遠藤洋路 教育長	分かりました。 他にはよろしいですか。 では、他にご発言がなければ本件は以上といたします。
<p>・報告（3）令和5年度（2023年度）熊本市立学校教員採用選考試験の志願状況について</p>	
<p>《濱洲義昭 教職員課長 提出理由説明》</p>	
遠藤洋路 教育長	<p>課長が頑張って、久しぶりに人数が増えていますね。</p> <p>大阪会場で受験する方は、当然熊本で受験する方と比べて、合格した後の実際に入る率というのが違う可能性もあるかと思えますけど、合格者を決める場合に、熊本会場で受けた人と大阪会場で受けた人、別々に合格するわけではありませんから、全体的に考えてどうなのかというのはどう決めるんでしょうか。</p>
濱洲義昭 教職員課長	1次は会場を分けますけど、2次は当然一緒のところで行いますし、それぞれの会場別から最終的に合格者をどうするか、そういったルールは全く決めておりません。そのような状況です。

遠藤洋路 教育長	どちらの会場で受けても上から順番に取るんでしょうけど、最終的に合格に入った人の中で大阪の人が非常に多ければ多少多めに合格を出すとか、大阪の人が少なければ今までどおりだとか、そういう何か考慮が必要になってくる可能性はあるんですか。
濱洲義昭 教職員課長	そうですね。採用予定者は、目安といたしますか、ですので、その辺はまた合格者決定の段階で、対応が必要であれば検討の可能性もあるかもしれません。
遠藤洋路 教育長	分かりました。
澤栄美 委員	質問なんですけど、臨採を何年か経験した方は1次試験免除になるということを聞いたんですけど、今後もそのようにされるのでしょうか。
濱洲義昭 教職員課長	今回の試験で、熊本市の臨採を経験された方、直近5年間で通算36か月以上の方は1次試験を免除するというかたちを今回の試験から取りました。その前にも少し優遇措置はあったんですけど、今回少し拡充しています。
澤栄美 委員	それは今後もその予定ということですか。
濱洲義昭 教職員課長	少なくともこの後も続ける予定ですし、経験年数あたりもどう見直していくかというのを今から決めたいと思っています。
澤栄美 委員	ここからは意見になるんですけど、採用される方の学びに関わる仕事をした経験上からお話をすると、特に私の場合、養護教諭ですので、この知識ぐらいは知っておいてほしいよねという部分があるわけです。特に養護教諭は命に関わるような場面に遭遇することもあるって、教諭とか栄養教諭とか、他の職種の人に関しては分からないんですけど、例えば1次試験に1回は合格しているとか、そういったことは加味されずに、ただ経験のみで大丈夫ということになるんですか。
濱洲義昭 教職員課長	現行制度ではそうです。

澤栄美 委員	<p>臨採の場合は今、教員が少ないので、ある程度、探しているぐらいですよ。臨採をずっと長年やってきただけで、それでいいのかなと思ったりします。また、そのときに、臨時採用のときの評価というのは当然あるわけですけど、そのあたりはどのくらい加味されたうえで、臨採時期が何年以上というふうにされるのか、それとも単に、3年以上であればそれでもう全くオーケーということになるんでしょうか。</p>
濱洲義昭 教職員課長	<p>そうですね、今のところは職務実績ですとかそういったことは全然最初の要件に加味されていませんので、今ご指摘のあった分については、例えば面接ですとか2次試験の段階で、そういった着眼点でこういったものが必要だというものがございますら、また個別に教えていただければと思います。</p>
澤栄美 委員	<p>面接の時点で、ある程度このくらいは知識として当然あるべきだということを十分に見ながらやっていくということになりますか。</p>
濱洲義昭 教職員課長	<p>必ずしも面接だけかと言われると、また別のやり方があるならば、それを取り入れられればやりたいと思います。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>おっしゃるように、今、臨採が、教員免許持っていればもう誰でもいいからとにかくやってくださいというような状況で、教員免許持っているだけだということで、臨採を3年やって1次試験の免除と、一切勉強しない人が受けるという可能性もあると、そういうご心配ですよ。</p> <p>1次試験免除ですから、確かに2次試験でやるしかないんですけど、そこは最低限のものは確保できるようには当然していく必要はあるかなと思います。</p> <p>ですから、1次試験を全部免除にするならば、2次試験のやり方は多少今までと違って工夫していく必要はあるでしょう。</p>
西山忠男 委員	<p>こういうかたちになった理由は、2次で面接をして臨採の人が来たときに、なかなか本採になれない理由は何でしょうかとお尋ねすると、そもそも1次で通っていませんでしたと、それは現場の仕事が忙しくて受験勉強する時間がなかったからですということと言われる方が多いんですよ。そういう方の中には非常に教員として優れているとしか思えない人が結構いるん</p>

澤栄美 委員

です。何でこの人が今まで本採に通らなかったんだろうというようなことがあったので、こういう制度を設けたらどうですかという話になったんだと私は理解しています。

澤委員がご心配のように養護教諭は確かに命に関わる仕事ですから、その点はまた考えていかなきゃいけないかなと思います。面接のときに質問で大事なことをきちんと把握しているかを確認するとか、そういうかたちでしなきゃいけないのかなと今思いました。

経過は分かりました。私も長年教員をやっていたので、本当にこの人が10年も合格せずに、すごく子どもからも保護者からも信頼されているという方はたくさんいらっしゃったので、それも十分理解はします。

ただ、やっぱり養護教諭としてこれぐらいは知っておかなきゃいけないのという部分だけは2次試験の段階でちゃんと選別できるようにできたらと思っています。

遠藤洋路 教育長

今、両委員がおっしゃったとおり、この制度を設けた趣旨は、いい先生なのになかなか通らないという人がいらっしゃるのので、そういう人を正規の教員に早くしてあげたいということでこういう制度をつくっているわけです。

ただ、一番危惧するのは、本当にいい先生で、保護者からも子どもたちからも評価もいい先生なんだけど最低限のことを知らないという、それが重なる可能性があるのかどうかというところは少し今の話を聞いていて心配になりました。そこはどうですか。

澤栄美 委員

私は養護教諭のことだけを考えて言ったんですけど、本当に担任の先生とかでもそういう方はおられました。養護教諭の中では、ちょっとどうかなと思う人が、例えば100点満点の80点ぐらいが1次の最低ラインという場合に、60点、50点ぐらいしか取れないような知識しか持たないのに採用されると、本人も苦勞するでしょうけど、やはり学校も困ると思うんですよね。だから何とかうまい具合に最低でもここら辺はというところを、2次試験の中に入れてできればいいかなと思います。確かに、本当に一生懸命やっているからこそ勉強の時間がなくてという方はたくさんおられると思います。

遠藤洋路 教育長	分かりました。早く正規にしてあげたいなという先生と、もうちょっと最低限のことは勉強してねという先生をうまく見分けられればいいわけですけど。
澤栄美 委員	そうですね。
遠藤洋路 教育長	それをするにはもうちょっと具体的なことを考えていかないとですね。 他にはよろしいですか。 他になれば本件は以上といたします。

・報告（4）令和5年度（2023年度）熊本市立学校管理職等採用選考試験について

《濱洲義昭 教職員課長 提出理由説明》

遠藤洋路 教育長	私から1点よろしいですか。 2ページの校長と教頭等の志願者の推移を見ますと、平成28年ぐらいまではどちらも有資格者のうちの志願する人の割合が下がってきているわけですが、それ以降、29年度以降、校長は志願する人が増えてきていて、教頭は横ばいで、昨年また少し減っているように見えますけど、何かこの辺の、校長と教頭はなぜ違う傾向になっているのかが、もし分かれば教えてもらえますか。
濱洲義昭 教職員課長	はっきり、分析といいますか、検討をそんなにしたわけではありませんけど、当課の教員の方たちに聞いてみますと、教頭になられて受験資格がある限りはやっぱり校長を目指すという方がかなりいらっしゃいますのでこういう数字に表れていると、有資格者のほとんどは受験をされるということですけど、教頭に関しましてはやはり多忙なポジションだということがあるのではないかとこのように見えています。 ただ、うち女性の数字を見てみますと、全体が下がってきている中でそこまで下がっていないんです。男性の受験有資格者が少し敬遠しがちな傾向があるのかなと、このように見えています。

遠藤洋路 教育長	<p>分かりました。</p> <p>教頭も、令和3年を除けば、ここ五、六年はそんなに変わっていないんです。横ばいみたいな感じです。急に令和3年に下がりましたよね。これは、何か心当たりがあれば教えてください。</p>
濱洲義昭 教職員課長	<p>ありませんが、去年試験を実施してみて、がくっと200人を切ったなというのは目に入りました。</p> <p>今年度の志願状況を見て、どうにか原因を探りたいなということと、増やすためにどうするかということですけど、1つには、事務職員を追加するという取組も入れましたので、まずそれがどう機能するかということまで見ていきたいと思います。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>分かりました。</p> <p>年齢構成上、対象者が減るので絶対数が減るのはある程度しやうがないと思いますけど、志願率ですよ、これ以上減らないでどうやったら回復するのかというのをまず考えましょう。</p>
出川聖尚子 委員	<p>質問ですが、校長も教頭も、有資格者Aのうち女性はどれぐらいいるのか分かれば教えてください。校長のほうはいいですけど、教頭のほうは有資格者Aというのは実際はどれぐらいいるのでしょうか。</p>
濱洲義昭 教職員課長	<p>すみません、手元にありません。また整理してお知らせします。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>受験者のうち女性しか確かに書いていないんですよ。有資格者のうち女性が書いていない。</p> <p>でも、全体の教員の男性・女性の構成からいえば半々ぐらいいるのでしょうか。</p> <p>分かりました。また後で調べてください。</p>
西山忠男 委員	<p>前から議論していますように、男女含めて50歳前後の若い校長を増やしたいという気持ちが我々の中にあるわけですが、そのためには若い教頭も誕生させなきゃいけないわけで、現場で校長先生がこれはという人を見つけたら積極的に教頭試験に応募するように勧めてもらうような、そういう取組が必要なんじゃないかなと思うんですよ。教頭は大変だからと避ける傾</p>

濱洲義昭 教職員課長

向があるのは分かりますけど、働き方改革で教頭の負担も減らすように努力しているわけですから、ぜひ本市の教育のために頑張つてよと校長先生が声をかけるような、そういう取組をやっていただきたいと思います。

受験の動機を聞きますと、やはり上司からの声かけというのがあるというふうにも聞いています。

もう一つ、何で増えないのかなとみんなで話をしていたんですけど、教育センターでやる研修体系を、経年研修をする中に、例えばリーダー向けとか、将来管理職を目指すとか、そういった視点での研修あたりも入れていくと少しまた変わってくるんじゃないかと思うんです。内部の話にはなりますが、教育センターの研修体系との連携とか、そういったものも必要かなというふうには感じています。

澤栄美 委員

質問なんですけど、「教頭等」になっていますよね、これは主幹を含んでいるということでしょうか。主幹の制度を熊本市に取り入れられたのは15年以上ぐらい前で、最初は主幹だけの試験があっていたと思うんですけど、主幹は熊本市の場合は教頭になるためのものとして捉えているので、「教頭等」になっているのでしょうか。

濱洲義昭 教職員課長

おっしゃるとおり、この「等」は主幹教諭のことを指しています。試験についても同じものを受けて、1次試験合格で2次不合格という方が主幹教諭の対象となって、そこから主幹教諭に登用する、このような仕組みです。ですので、おっしゃるとおり教頭になる前段のステップというふうに捉えています。

澤栄美 委員

今どうかは分からないんですけど、例えば東京でいうと生徒指導主幹とか何々主幹とか、管理職の前段みたいな感じではなく、主幹としての職務の役割というのがあって主幹制度という感じだと私は受け止めていたんですけど、学校によっては主幹の先生が例えば補助役みたいになっているところと、きちっとした役割、例えば生徒指導に関してというようなところもあるように思うんですよね。今後も、これはあくまで教頭の前の段階の人という立場で、学校に主幹として行った場合に、どんな仕事を期待しているのかなというのを知りたいと思いました。

濱洲義昭 教職員課長

おっしゃるとおり、主幹教諭の学校での動きというのは、それぞれの学校で求められる動きをしていて、生徒指導寄りとか教科指導寄りとか経営寄りとか、そういったかたちで少しずつ色が違うと思いますので、さっき澤委員がおっしゃったような生徒指導主幹とか、最初から役割を別々にした選考をしようという考えは今のところありませんけど、そういう必要が出てくればまた今後検討することになると思います。今は現行どおりで考えています。

遠藤洋路 教育長

他にはよろしいですか。
他になれば本件は以上といたします。

日程第5 自由討議

・テーマ「働き方改革の推進と教職員のメンタルヘルスについて」

《濱洲義昭 教職員課長 説明》

遠藤洋路 教育長

では、自由討議ですので、どなたからでもご自由にご発言をお願いいたします。

出川聖尚子 委員

先ほど、教職員の方が休職されるのは、精神疾患が割合として高いんですけど、この方たちがこうならないようにするための方策を考えなくちゃいけないと思っています。若い方が令和3年度は増えていきますので、この方たちに対して、以前の対応とは少し違うかたちで、起こらないための方法を考えていかなくちゃいけないんじゃないかなと思います。個人的には、前回の会議でも話したと思いますが、日々の中での休息時間を業務時間内に1時間どこかで取れるとか、しっかり休暇が取れるような仕組みをつくり、日々のストレスをためないということですよ。休暇を必ず取るようにはなっているかと思いますが、確保するような、仕事のこと考えなくていいような時間を日々の中で、3か月とか1年の長いスパンになるかもしれませんが、そういう離れてリフレッシュできる時間を持つようにすることがまず1つ大事だということと、職場で相談できるような体制をさらに細やかにつくっていくことが必要と思っています。20代、30代、40代、どの年代でも年度ごとの役割や責

<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>任があると思いますので、支えていく体制が必要だと思いました。</p> <p>おっしゃるとおり、いかに重症化を予防するかというのは、休職に追い込まれる前に対応するかというのが2ページのところにも書いてあるように、それをもっと充実していかなきゃいけないということかと思います。</p> <p>1ページの病気休職のうち精神疾患による休職者は、これを見ると確かに横ばいであって、どんどん増えているわけではないんですけど、減ってもいない。令和2年度は結構少なめでしたけど、3年度は結構多いということで、年度によってもかなり違いはあるんでしょうけど、これを減らしていくということは私たちとしてはやっていかなきゃいけない。</p> <p>でも、どういう年に多くて、どういう年に少ないという傾向が見えるほどの差はないですね。いろいろ働き方改革とかやっているけど減ってはいないということは、働き方改革の成果が今のところここには表れていないということになるのかもしれませんが。一方、どんどん増えているというわけでもないので、どうやったら減るのかというのは非常に難しいところです。</p> <p>何か事務局で、こういう精神疾患による休職者を減らした成功事例みたいなものがあったりしますか。</p>
<p>濱洲義昭 教職員課長</p>	<p>他団体のことかと思いますが、ちょっと調べておりません。全国的に統計も出ていますので、見ていきたいとは思っています。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>全国的にはどうなっているんでしょうね。横ばいなんですかね。</p>
<p>濱洲義昭 教職員課長</p>	<p>並べて経年で見ただけではないんですけど、数は多分減ってはいないと思います。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>そうですね。熊本市が全国と比べて非常に特徴があるということではないですよ。割合的にもそんなに極端に全国平均と違うことはなかったように記憶しています。</p>
<p>西山忠男 委員</p>	<p>休職者の割合は1%以下で、経年変化もあまりない、ほぼ横ばいで推移ということで、想像したほどひどくないというのが率直な印象なんですけど、退職者はいないんですか。</p>

遠藤洋路 教育長	休職じゃなくて退職という意味でしょうか。
西山忠男 委員	はい。
遠藤洋路 教育長	いますよね。
濱洲義昭 教職員課長	います。
西山忠男 委員	退職者の推移というデータはないのでしょうか。
濱洲義昭 教職員課長	すみません、今、データを持ち合わせておりません。
遠藤洋路 教育長	先日の議会で退職者と休職者の数を答弁しました。そのときはたしか退職した人は二十数人、令和3年度でいいますと休職した人が34人ですので、それよりは退職した人の数は少なかったということになります。退職した理由も民間に転職するか結婚するか病気以外のものもあって、退職者は当然いますが、精神疾患で退職する人が大量にいるという状況ではないというのが現状ですかね。
西山忠男 委員	休職に至る人はこの程度で済んでいるということなんですけど、想像ですが予備軍が結構いるんじゃないかという、働きながらかなりメンタルにもまいつているというような教員がある程度いるような気がするんですよね。そういう人たちに対するケアというのをしていかないと、直ちに休職に結びついてしまいます。そのあたりは学校現場ではどういうふうに配慮しておられるのでしょうか。
遠藤洋路 教育長	それは澤委員が一番詳しいんじゃないですか。
澤栄美 委員	2ページの中の④の中で要因別人数内訳というのがあるんですけど、業務上のストレスと、その次、既往症の悪化と同じ割合ですけど、職場の人間関係というのが高いんです。 この学校問題対応相談なんですけど、私が学校で勤務していたときに担当してらっしゃる保健師さんが以前の学校で同じ校区の方だったのでよく声をかけていただいて、相談枠が空いているからどうですかみたいな感じで声をかけられていました。

児童・生徒の発達等の問題行動への対応ということで、基本的には教員が相談するんだけど、保護者の方も連れて行ってというのを度々経験したことがあるんですが、この中で、あまりちよっと言いづらいといえは言いづらいんですけど、上司からの叱責とかそういうのがあってどうしたらいいのかなというのを、案外、養護教諭は、結構相談を受けていました。そのときに、この学校問題対応相談、直接連絡をして、実際叱責している方には分からないようにするというようなこともありというふうに私は理解していたのですが、そのような人たちって結構多いのかなというのが1つです。それと、先生方が言われるのが、「自分がカウンセリングを受けたい」とよく言われるんですよ。スクールカウンセラーは基本的には子どもとか保護者が対象なんですけど、学校内でそういうことができないのかなと思います。学校問題対応相談はわざわざ休んで行かなきゃいけないですよ。心ある養護教諭は本当に自分の仕事を横に置いて教員の話の聞いているというのも結構あるんですけど、スクールカウンセラーが教員に対してカウンセリングをするのは制度的には難しいですよ。

学校問題対応相談で上司からのいわゆるパワハラ的なことがあったときの相談が結構あるのかということと、それに対してどういう対応されているのかというのが1つです。それからスクールカウンセラーが教員の話の聞くことが制度上できるかという、この2つです。

濱洲義昭 教職員課長

1点目、お答えいたします。細かい相談内容の内訳までは持っておりませんが、中身としてはおそらくあると思います。ご自身の体調面の不安のこともありますならば、職場での人間関係の悩みを学校ではなかなか相談する人がいないので医師とか臨床心理士に聞いていただくとか、そういったことになります。

澤栄美 委員

産業医の先生とか臨床心理士の先生方に聞いていただくようなかたちでということですね。本人も上司もどっちもどっちみたいな感じのときもあるのでなかなか難しいのかなと思いますけど。分かりました。

あとスクールカウンセラーのところはいかがでしょうか。

須佐美徹 総合支援課長

スクールカウンセラーは基本的に児童・生徒、それから保護

	<p>者の対応とはなっておりますけど、先生方も子どもたちとか保護者の対応についてどういうふうにすればいいかというご相談もされたりします。お悩みのお話をすることは可能なので、私も学校にいたときは積極的に先生方にもそういった面を含めて悩みや相談、基本的には子どもたちとかの対応の中で、ひょっとしたら上司からの指導と自分の考えが違ふとかいうこともあるかもしれませんが、そういうのも含めればそういうご相談はできると思っております。</p>
澤栄美 委員	<p>私がさっき、職場の人間関係、パーセンテージを言いましたけど、これが全部パワハラと言っているわけではありません。同僚同士でのトラブルというのが、人間ですのでやっぱり合う合わないがあるので、そこは職場内でこんなことがあったんだよと言えるような状況があればいいのかなとは思っています。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>職場の人間関係って、これは当然上司との関係も同僚との関係も部下との関係も全部入っているという、そういう理解でしょうね。</p> <p>もともとの西山委員のご質問は、学校でどういう対応を実際やっているのかという、そういう話でしたよね。</p>
西山忠男 委員	<p>要するに、校長、教頭が見ていけば、予備軍になるような人は分かると思うんです。その人たちに対して、どういう対応をしているのかというのが問題だと思うんです。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>その辺は澤委員が詳しいのかなということで、さっき振ったんですけど。</p>
澤栄美 委員	<p>何か自分の思いが強くて、質問をしてしまいました。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>自由討議は基本的に委員の間の討議なので。事務局に質問してももちろんいいんですけど。</p>
澤栄美 委員	<p>養護教諭に相談される場合がとても多いと思います。仕事があっても、養護教諭は暇そうにしていたほうがいいですよ。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>相談しやすいということですね。</p>

澤栄美 委員

誰かが来たら、いかにも仕事していなかったふうにして、本当は忙しかったとしても、そういう自分は置いておいて。だから私なんかは、置いては駄目と言われたときもありましたが、保健室や職員室にだるまストーブを必ず置くようにして、冬場はそこで温まりながら、放課後とか空き時間に先生たちが来られてこうだった、ああだったと聞いておりました。元気がない人には、やっぱり養護教諭の性といいますか、声をかけるのが養護教諭かなというふうに。もちろん全てがそうだとは言いません。養護教諭以外には、あとは学年の先生方の中でうまく調整したりというのはあるのかなと思います。

ただ、さっきから出川委員が言われているように、休みを取るというのは、この間も言ったように、校長も人をつける以外には、職務上なかなかゆっくりする時間の確保というのは難しいのかなと思います。

西山忠男 委員

養護教諭がある意味救いの神みたいなどころがあるというのは理解できるんですけど、やはり管理職の役割って非常に大きいと思うんですね。上司に叱責されたということでストレスになる、ただし上司はやっぱり叱責する必要がある場合もあると思うんですね。そのときに、もちろん叱り方はどんな叱り方をするかというのは、あるいはどんな注意の仕方をするのがいいのかというのは大事な問題です。それからその後のフォローですね、どうフォローするのか、そのあたりの配慮が欠けるとパワハラと言われても仕方ないようなことになってしまいます。やはり校長と教頭の役割って非常に重要で、彼らがしっかり心配りして教員のメンタルを見てやらないといけないんじゃないかなと思ったものですから、そういうことができているのでしょうかというつもりでお尋ねした次第です。

澤栄美 委員

人によるかなというところもあって。私もいろんな管理職につきましたけど、本当にそういうふうに見てくださる管理職もいれば、「うーん？」と思うような管理職もいらっしやったので、ここはリーダー研修とかで、リーダーとはどういうものか、そういう研修がやっぱり必要なのかなというふうに思います。

遠藤洋路 教育長

管理職というのは、あれですか、職員のメンタルケアというのはどのぐらい実際学んでらっしゃるんですか。

澤栄美 委員	それは教育委員会の事務局のほうが詳しいかと。
遠藤洋路 教育長	それはそうですけど、実際に見ていてどうなのかなということです。
澤栄美 委員	そうですね。その人の持っている資質みたいなのがやっぱり大きいのかなと思いますね。やはり昔から、もう私も昔の人間なので、私より年上の先生方は昔ながらの、自分たちも頑張っていたんだからそのくらいでへこたれるなどか、校長先生が教頭先生に対しておまえたちは駄目だというような先生もおられましたので、そういうときは教頭先生も保健室に来て、ストーブで温まりながら、どうか言いながらというのはありました。その人が持っている人間性みたいなのが一番大きいとは思いますが、でも職員のメンタルケアをどの程度勉強されているのかというのは、ちょっと私では知り得ないです。ただ、リーダー研修とかは以前よりもよくなっていると思います。
遠藤洋路 教育長	分かりました。 その人の人間性がメインだということは、あまりそれ以外の勉強はそんなにしていないということの裏返しなんでしょうね、きっと。
澤栄美 委員	いや、私はそこまで調べたわけじゃないので。
遠藤洋路 教育長	でも、その人のもともとの資質がもろにそのまま出ているということは、そういうことではないでしょうか。
澤栄美 委員	そして受ける相手側も、その人自身が持っている耐性とか前向きさとか、その程度言われたくらいでがくんとなるかなという人もいれば、それを糧に次は頑張ろうという人もいるので、なかなかそこは難しいかなと思います。
遠藤洋路 教育長	管理職の研修の際に、もっとこの部分を強調していくというか、丁寧にしていく必要はあるんでしょうね。おっしゃられるように、昔に比べると若い人のメンタルの在り方が変わってきているのもあるでしょうし、世の中の認識が変わってきている面もあるでしょうから、これをもっと減らしていこうと思えば、今よりも相当充実したものにしていける必要はあるんだろうなと

	<p>思いますよね。管理職の学ぶべきものの中のかなり重要な要素として、これを入れていく必要があると思っております。</p> <p>澤委員、ちなみにその職場、しつこく聞いて申し訳ないですけど、保健室に来て相談を受けて、さっき西山委員の言い方でいうと予備軍だから気をつけなきゃいけないなというのは日頃から見ていて思われるのか、実際相談を受けてから思われるのか、その辺ってどうでしょうか。</p>
澤栄美 委員	職員のほうですね。
遠藤洋路 教育長	そうです。
澤栄美 委員	管理職じゃなくてですね。
遠藤洋路 教育長	はい。
澤栄美 委員	<p>そうですね。私はできるだけ職員室に行くようにしています。あと校内巡視とかもありますので、そういった中での状況というのは何かやっぱり見えてくるところはありますね。よく教員同士で話をしている人もいれば、何かぼつんとしている人もいるし、何か妙にかりかりしている人もいるし、そういう方にはちょっと声かけしたりとかはしていた感じですね。</p> <p>校長先生でいうと、自分の経験ですけど、信頼されてみんなが寄ってきてくれるような校長先生は、よく職員にも声をかけられるし、子どもたちにもよく声をかけられています。そういう方が校長先生の学校にはあんまり心配な教職員もいなくて、そうでない方の場合は、子どもも一緒だと思うんですけど、みんながきゅっと委縮するとか、そんな感じにはなってしまいますよね。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>よく分かりました。ありがとうございます。</p> <p>そうすると、横ばいとはいえ、可視化すると多い学校と少ない学校とあるのかもしれないし、少ない学校とか、全然休職者が出ない学校、あるいはそういう体調壊す人が少ない学校の何か秘訣みたいなものがあるのかもしれないですよ。だからさっきの、もちろん他団体の成功事例があればというのは、今のことももちろんですけど、せつかく熊本市には百何十校もあるので、その辺も積極的に探っていく必要があるのかなと思います。</p>

小屋松徹彦 委員

す。

まず、このグラフというか、数字を見ながら思ったんですけど、まず特に若い人がこういう精神疾患になるのかなと思ったからそうでもない、20代から60代まで満遍なくいらっしやって、むしろ40代、50代、この辺の方も結構いらっしやるんだなというのがこの図から分かりました。それから要因を見たときに、業務上のストレス、児童・生徒指導、それから職場の人間関係、ここら辺が結構多いということですよ。

これを見たときに、年齢じゃないんだなということと、あと、これから見えるのは、学校の中でちょっと孤立しているというか、相談相手がないというか、何かそういうことが結果的にここにつながっているのかなと思ったんです。今、皆さんの話を聞きながら、だからやっぱりそういう人に目が届く方が、学校の中にいないといけないと、何かメンター的な存在といえますか、それは一番は教頭先生じゃないかなというふうに思うんです。教頭先生はいろいろ忙し過ぎるけど、本当は教員一人一人に目を向けていくというのが大事なところだろうなと、さっき澤委員がおっしゃったように、教職員室に入って行って先生たちの顔見るとかそういうことを、澤先生がされていたけど、本当は教頭先生とか、もっと教職員に近い部屋にいらっしやる人がまず目が届いてほしいなというのはあるんです。そこら辺ができてるのかなと思いました。

それと、結構仕事をいっぱいいっぱいで行われていると思うんですよ、時間内ですね。だからもうそれはどうしようもない。でも、前回も言いましたけど、たまには早く帰るといって、例えば5時とか5時半にすぐ帰るとか、そういうことをして学校から別の場所に自分を移すということは、何か精神的にちょっと余裕が生まれるということもあると思うので、やっぱりそういう時間もつくったほうがいいんじゃないかなと思います。

遠藤洋路 教育長

ありがとうございます。

もう一点補足すると、意外と校種別に見ると小学校が多いですよ。

小屋松徹彦 委員

そうですね、小学校が多い。

遠藤洋路 教育長

中学校は意外と少ないんですよ。さっき出川委員がおっし

澤栄美 委員

やったように、小学校は休みが取れないというか、ずっと朝から授業して、給食とか掃除とかまで含めると息抜く時間がないというのも、もしかすると要因としてはあるのかもしれないですよ。

小屋松委員が言われたように、この間、NHKかどこかでやっていた「この日はこの時間で帰る」という日を学校で全部設定して、それから自分の時間ができてよかったというのがありました。各学校にそういうのを取ってくださいというのはあっているけど、結局絵に描いた餅みたいになっているところもあるので、それを推進していったらいいんじゃないかなと思いました。

それとまた別件で、その他のところに「新規採用者の増加に伴う若手職員への支援」というところがありますけど、今、スクールサポーターの取組があっている中で、今年、養護教諭に関してはスクールヘルスリーダーというかたちでたまたま何かの予算がついて、退職2年後の元養護教諭が、臨採とかも多いので、学校を回っているという役割をしています。これがすごくいいようなので、また来年以降も続けてもらいたいと思います。教諭に関して言うと、授業に関して、ステップアップ・サポーターですか、行かれて授業を見てアドバイスするという事業がありますが、こんなことが困っているとかいうのを聞けるようなところもやっていただくといいのかなというふうに思ったところでした。

遠藤洋路 教育長

確かに再任用というのは、こういうお仕事の今までの経験を生かしてやっていただけるので、非常に有効だと思いますよね。再任用だったら、新しく予算を事業として取らなくても、皆さん再任をしますので、その中からそういう役割の人を探してお願いすればいいので、そこはもっと増やしていくということも考えたいなと思います。

西山忠男 委員

先ほどの早く帰る時間の日を設けるということも確かに有効かもしれないと思うんですけど、一方で頭の中に仕事のことが残ってしまっていると、どうしようもないんですよ。

そういう意味ではストレス発散させるような取組、レクリエーションのようなものが学校現場であるのかどうか。今はもう飲み会もなくなっちゃって、どうやってみんなストレス発散し

遠藤洋路 教育長

ているんだろうと思うような状況なんですけど、特に若い人はそういうレクリエーションが要るんじゃないかなと思います。自分でそういうことができる人はいいんです。でも、できない人は職場全体で何か、スポーツ大会でもいいし飲み会でもいいし、そういう機会があったほうがいいんじゃないかなと思うんですけど、どうなんでしょうか。

気分転換というかね。
どうですか。

松島孝司 教育次長

私、学校から離れて長くなるので、私が学校のことを答えるのはあまりふさわしくないかもしれないんですが、いろんな学校のお話を聞くと、正直コロナの状況では、職員間の親睦の場というのが非常に少なくなったと、皆さん、嘆いてらっしゃいます。

最近もあっていると思いますけど、職員体育をよくやりましたし、教職員のサッカー大会とかバレーボール大会とかありまして、それに向けてみんなで練習するとかですね。

あと、教職員は、節目、節目で結構飲み会をやっています、例えば運動会が終わったら盛大に打ち上げをしましょうとか、夏休み入るときにやりましょうとか、最近はなかなかできませんが、節目、節目でというのはございました。

先ほど、教育長から小学校のほうが多いというのがあったんですけど、中学校は空き時間に他の先生と話をする場面というのが職員室の中で取りやすいんですよね。そういう意味で、日頃の何気ない話というのがとても大事だということを皆さんからもよく聞きます。職員室の一部分に談話スペースを設けているところも多いので、そういうのがある意味、職員の息抜きというんでしょうか、ストレス発散の場にもなっているところはあると思います。

遠藤洋路 教育長

コロナで少しやりにくくなったというのはあるんでしょうけど、こういう中でもできる方法を考えていく必要があるでしょうね。

職場の飲み会とか職場のレクリエーションというのは、上の人はいいけど下の人にとってはむしろ嫌だと思ってしまうかもしれない。必ずしもそれが万能の解決策じゃないかもしれませんが、人によって、場合によってですね。

令和4年（2022年）6月 教育委員会会議録【6月23日（木）】

<p>〔閉会〕 遠藤洋路 教育長</p>	<p>他にはよろしいですか。 では、自由討議は以上としたいと思います。</p> <p>本日の会議日程は全て終了いたしました。これで、令和4年6月定例教育委員会会議を閉会いたします。</p>
--------------------------	--